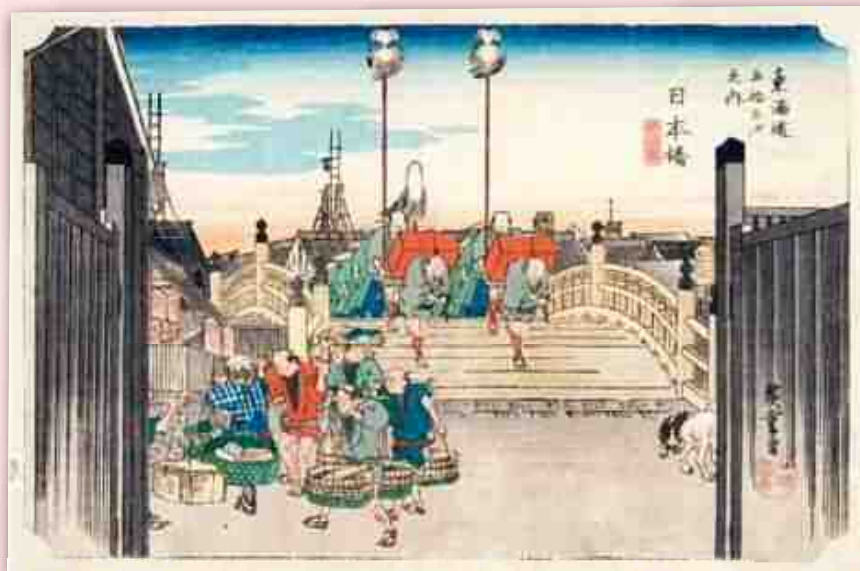


市宮一 館物博 りよだ

もくじ

特別展「浮世絵展 描かれた風景」	2
企画展「くらしの中の民具」	4
博物館講座「尾張平野を語る20」	4
文化財保護事業「一宮市の埋蔵文化財包蔵地」	5
文化財探訪「新指定重要文化財・妙興寺の九条袈裟」	6
博物館アルバム(平成27年度前期)	7
平成27年度後期 催し物のご案内	8

No.56 2015.10



特別展「浮世絵展 描かれた風景」より
歌川広重《保永堂版 東海道五拾三次之内 日本橋》上・初版図 下・変わり図(ともに個人蔵)

特別展

広重 これも東海道五拾三次

浮世絵展 描かれた風景

2015年10月3日(土)～11月23日(月・祝) 主催／一宮市博物館・中日新聞社

江戸時代の人々に愛され、現在でも親しまれている浮世絵の代表格といえば、歌川広重（一七九七～一八五八）の《東海道五拾三次》を忘れることはできません。当館初の浮世絵展となる本展では、《保永堂版 東海道五拾三次》全十五図に加えて、変わり図六図すべてを展示し、江戸時代の出版事情や旅の有様などを交えながらご紹介いたします。

《東海道五拾三次》の出版

広重は、定火消同心を家職とする安藤家に生まれました。御家人といつても禄高は微々たるもので、始めはいわば副業として浮世絵師の道を選んだものと推測されます。文化六年（一八〇九）に父を亡くして家督を継いだ後、しばらくして歌川派の絵師・豊広に入門し、文政六年（一八二二）には家督を嗣子に譲って、画業に専念するようになります。

広重が版元である保永堂（竹内孫八）とともに《東海道五拾三次》の出版を開始したのは、天保四年（一八三三）頃です。この当初の版では、「日本橋」（表紙図版上）など冒頭のいくつかのシーンが別の版元（鶴屋喜右衛門）との共同出版となつています。図様の異なる変わり図（表紙図版下）が作られたのは、極印や版元印の様式から天保六年頃と推定されていますが、変わり図では保永堂の単独出版となっており、版木を独占するために広重に改作を依頼したのではないかと考えられています。

現在、このような変わり図は日本橋・品川・川崎・神奈川・戸塚・小田原の六図が知られています。このうちの戸塚（写真①）では、初版図では勢い良く馬から飛び降りていた旅人が、変わり図ではのそのそと馬によじ上つているなど、それぞれを見比べていくとまるで間違い探しのような面白さがあります。

多色刷り版画である浮世絵版画には、このような版木を異にする「異版」の他に、色の異なるものが存在します。今回の展覧会に出品される二枚の金鯢の図（安政二年・一八五五刊、写真②）は、一方は美しい金色ですが、一方は鱗のつなぎ目が黒ずんでいます。名古屋城の金鯢は弘化三年（一八四六）の改鑄で多量の銀が混ぜられ、鱗を薄くして合わせ目も減らしたため、大風で鱗が剥がれ飛ぶなど、悲惨な状態であったようです。この黒い金鯢は当時の「真景」であったのかも知れません。

江戸の色彩

広重の作品に見られる鮮やかな藍色は、「ヒロシゲブルー」とも呼ばれ、欧米で高く評価されています。この藍色に用いられているプルシアンブルーは一七〇四年にベルリンでハイリッヒ・デーリースバッハによつて開発された合成顔料です。日本には十八世紀後半にもたらされ、ベルリン藍がなままってペロ藍などと呼ばれました。ペロ藍はそのままで青色に使われていた本藍よりも鮮やかで透明感があり、天保初期には藍一色で刷る藍摺絵のブームが起きるほど人々を魅了しました。

プルシアンブルーは、ヨーロッパでは軍服の染料に使われましたが、当館所蔵の陣羽織（写真③）にもプルシアンブルー染めの毛織物で仕立てられているものがあります。今回の浮世絵展では、このような江戸時代の豊かな色彩を、コチール染めの猩々緋やエンジュ染めの黄色など、当館所蔵の毛織物資料によつて概観します。



一宮市域には、文化財に指定されている肉筆の浮世絵が二点あります。本展会期中、普段非公開のこれらの絵画が特別に公開されます。この機会にぜひご覧ください。

（成河 端子）



①歌川広重《保永堂版 東海道五拾三次之内 戸塚》右・初版図 左・変わり図（ともに個人蔵）



③紺ヘルヘトワン地桐紋陣羽織 (当館蔵)



②ともに歌川広重(二代)《諸国名所百景 尾州名古屋真景》(個人蔵)

特別拝観

11月5日(木)市民文化財めぐりにて



一宮市指定文化財《桜花美人の図》(頓聴寺蔵)

特別公開

特別展会期中、博物館常設展示室にて



愛知県指定文化財《紙本著色浮世絵肉筆観桜図屏風》(個人蔵・当館寄託)

特別観覧料 (常設展を含む)

	個人	団体	★セット割
一般	500円	400円	1,000円
高・大	300円	240円	500円
小・中	200円	160円	300円

※()内は20名以上の団体料金

★博物館・美術館観覧券セット

特別展会期中、博物館および美術館受付にて販売

関連イベント

●講演会

- ①10月18日(日)「広重の風景版画 魅力のからくり」
神谷 浩氏(国際浮世絵学会常任理事/名古屋博物館副館長)
- ②11月8日(日)「広重えがく——臥遊の愉しみ——」
前田 詩織氏(中山道広重美術館学芸員)

●展示解説

- 「はじめての浮世絵鑑賞講座」
10月11日(日)、11月1日(日)・15日(日)・22日(日)

●たいけんの森

- ①「かんたん浮世絵」毎週土・日曜日、祝日
- ②「はたおり・糸つむぎ体験」毎週土・日曜日

一宮市三岸節子記念美術館 特別展「一宮の文人野村一志と土田麦僊をめぐる画家たち」
2015年10月3日(土)～11月23日(月・祝) 住所:一宮市小信中島字郷南 3147-1 TEL:0586-63-2892



石刀祭(2014年4月20日撮影)

企画展

くらしの中の民具

2016年1月9日(土)～3月13日(日)

この展覧会は、歴史を学び始める小学校三年生のために、民具を通して当時の生活を紹介するもので、平成三年度から二十五回目を迎えます。今年度は一宮市の山車祭礼を始めとした「まつり」を取り上げながら、日常と非日常を行き交う人々の暮らしのありようを捉えていきたいと思えます。

市内今伊勢町馬寄の石刀神社で毎年四月に行われている石刀祭は、頭人行事、山車、献馬からなる祭礼で、平成二十二年度に一宮市指定無形民俗文化財に指定されました。伝承によれば、社殿を修復した徳川家康への奉祝として慶長十三年(一六〇八)に始まったとされ、現在までからくり人形を伴う三輛の山車や伝統的な頭人行事が残るなど、尾張地方の山車祭礼のなかでも貴重な存在です。市域にはこの他にも、山車の提灯飾りが壮観な瀬部の白台祭や黒岩の川祭など、特色ある祭礼が残っています。

本展では、祭礼などの特別な日の道具と日々の暮らしの道具、それぞれを使用の機会に着目しながらご紹介します。

(成河 端子)

博物館講座

尾張平野を語る 20

一宮市は濃尾平野の東北に位置し、縄文時代の中ごろから人々が暮らしはじめ、現在までさまざまな文化を育みながら尾張の文化の一端を担ってきました。一宮市博物館では、これまで十九回にわたり、自然・考古・民俗・歴史・歴史・美術工芸・建造物などさまざまな分野の講師をお招きし、尾張平野の歴史と文化を紹介してきました。二十回目となる今回は、尾張地域の信仰とその歴史民俗をテーマに行います。



背景『増補頭書訓蒙図彙大成』(寛政元年・個人蔵)

【日時・講師】 各回とも午後1時30分～午後3時

- 平成28年 3月6日(日)
「三禅定～白山・立山・富士山をめぐる旅」
富山県 [立山博物館] 学芸員 加藤 基樹氏
 - 平成28年 3月13日(日)
「尾張の陰陽師・万歳師・修験者」
愛知学院大学文学部教授 林 淳氏
 - 平成28年 3月20日(日)
「真宗民俗」(仮)
同朋大学仏教文化研究所所員 蒲池 勢至氏
- ※内容は変更になる場合がございますので、詳細は博物館HP・市広報等をご覧ください。

【会場】 一宮市博物館講座室

【定員】 各回先着100名(当日整理券配付)

【聴講料】 無料、ただし観覧料が必要

一宮市の埋蔵文化財包蔵地

埋蔵文化財包蔵地の分布調査

一宮市教育委員会では平成二十四～二十六年度までの二カ年で市内の埋蔵文化財包蔵地の分布状況を調査しました。博物館だより№53（二〇二三年三月）でその途中経過を紹介させていただきましたが、調査前に知られていた二三箇所以外にも今まで見つかっていなかった遺跡があることがわかりました。市域全体の調査を終えた結果、全部で四〇七箇所の埋蔵文化財包蔵地を確認することができました。四月から、今回の調査結果を踏まえた埋蔵文化財包蔵地分布地図を、一宮市地図情報サイト「138マップ」の「埋蔵文化財情報」で見られるようになりました（画像）。「138マップ」では、埋蔵文化財包蔵地の範囲を確認していただくのはもちろんのこと、遺跡の範囲を左クリックしていただくと、包蔵地の名前と時代を見ることができ、さらに包蔵地名を左クリックすると出土資料などの情報を閲覧することができますようになります。また、埋蔵文化財包蔵地だけでなく、史跡や江戸時代の集落推定地の範囲も確認することができます。

埋蔵文化財とは

埋蔵文化財とは、地面に埋まっている土器などの遺物や、住居跡・古墳などの遺構のことです。これらの埋蔵文化財が埋まっている場所のことを、埋蔵文化財包蔵地または遺跡と言います。

私たちのまち一宮市は今から約五千年前に人が住み始めて以来、多くの人々が暮らし発展してきました。現在の市域を歩いてみても、昔の人々の暮らしの痕跡を見ることは困難ですが、痕跡が完全に消えて無くなってしまうわけではありません。地面を掘ると、遺物や遺構といった埋蔵文化財が見つかることがあり、そこに昔の人々が暮らしていたことを私たちに教えてくれます。

埋蔵文化財は、過去の人々の社会や文化を知る上で重要な資料です。一宮市では埋蔵文化財が埋まっている埋蔵文化財包蔵地の周知を促進し、その保護を図っています。

遺跡が少ない市域西部

「138マップ」で一宮市の遺跡の分布を見てみると、市域西側の木曽川に近い地域では、遺跡の数が少なくなっていることがわかります。これは一宮市域の地盤の成り立ちに関係しています。市域の大半は沖積地であり、木曽川によって運ばれてきた土の堆積によって地盤が形成されています。江戸時代初期に堤防が整備される以前の木曽川は、洪水が多く、遺跡の上に厚い土の堆積をもたらしていました。そのため、遺跡が見つかる地層は現在の地表面よりかなり深い位置にあります。このような場所では、深く掘削を行わない限り遺跡が見つかることはありません。つまり、遺跡が存在していないのではなく、発見されていない遺跡が多くあると考えられるのです。

未発見の遺跡を見つけるには

今回の分布調査では新たな遺跡が多く見つかりましたが、まだ発見されていない遺跡も少なくないと思われます。遺跡は土の中に眠っているため、地面を掘り返さなければ、その存在を知ることができないからです。

未発見の遺跡を見つけるためには、地域に住んでいる皆様からの情報が重要です。工事や耕作などで地面を掘った際に土器などの遺物が出てきた場合、一宮市博物館まで「一報ください。皆様からの情報が、一宮市の歴史を紐解く手がかりとなります。」

（藤井雅大）



138マップで見る埋蔵文化財情報 (<http://www.sonicweb-asp.jp/ichinomiya/>)

新指定重要文化財・妙興寺の九条袈裟

妙興寺の九条袈裟

本来袈裟は捨てられた裂や寄進によつて得た生地を接ぎ合せて一枚仕立ての粗末な僧衣であり、このことは仏教の規則である律に定められていました。次第に裝飾的あるいは豪華な裂が用いられるようになりませんが、律における精神的反映し裂を接ぎ合せてように仕立てられています。特に禪宗において袈裟は伝法衣と呼ばれ、伝法の証として師から弟子へ授けられるものの一つに挙げられます。今回の文化財探訪では昨年八月に国の重要文化財（美術工芸品）に指定された妙興寺（大和町）所蔵の九条袈裟二領を紹介いたします。

大応国師袈裟

袈裟は数枚の裂を接いだ縦長の一条を更に数枚横に並べて接ぎ合せており、その数に応じて五条、七条、九条、二十五条等の別があります。

本品は縦一三七〇cm、横二四九五cm、中央部が狭まった絹製九条袈裟であり、裏地が付いた袴仕立てになっています（写真①）。裏地には「妙興寺常住／開山圓通大應國師法衣」と墨書があり、妙興寺の勧請開山で鎌倉時代後期に臨済宗の発展に尽くした南浦紹明（大応国師、一二三三・一三〇八）所用と伝えられています。妙興寺文書には筑前の崇福寺より進呈された旨が記されています。

四角形の裂部分を田相と呼び、田相には柿のへたに似た四葉花文が織り出された頭紋紗が用いられています（写真②）。頭紋紗は紗地に平織で文様を織り出す技法です。紗は二本の経糸を一組として緯糸を絡ませた絡み織の一種であり、夏着物の紗と同じく透け感があるのに対し、平織は経糸と緯糸を一本ずつ交互に織り込み目が詰まっている為、文様部分が紗地に浮き立って見えます。また田相を縁取るように別布を宛がった部分を条葉と呼び、条葉もまた頭紋紗が用いられています。このような頭紋紗の織組織や文様表現は、南宋から元時代（十二・十三世紀）の絹織物に類例を見ることができ、南浦紹明の入宋時期に一致します。

大照禪師袈裟

本品は縦一五八〇cm、横三七五〇cm、中央部が狭まる単仕立ての絹製九条袈裟です（写真③）。袈裟の裏に「妙興開山圓光大照禪師法衣」の墨書があり、妙興寺を創建した滅宗宗興（大照禪師、一二二〇・八二）所用と伝えられています。

田相は公家装束に用いられる固地綾と呼ばれる有職織物を用いられ、経糸が緯糸二本分を渡る二枚綾地に、緯糸が経糸五本分を渡る六枚綾で文様を織り出しています。文様部分に光沢が生じて見えるのは、地よりも文様を組織する緯糸が長く渡っている為です（写真④）。田相は有職織物の中でも、天皇の衣裳にのみ用いられる桐竹鳳凰麒麟文と大変格調高い意匠となっています。我が国における有職織物の袈裟は稀有であり、その入手経路については、滅宗宗興が熱田神宮の築地修繕を行った際に、礼として贈与された可能性が指摘されています。あるいは、妙興寺が後光厳天皇（一二三三・八七四）の勅願寺であったことを踏まえると、天皇家近辺から入手された可能性もあり、本袈裟は天皇家と滅宗宗興との関係を窺い知ることができる非常に重要な資料であると言えます。

今回紹介した袈裟はどちらもその使用年代があきらかであり、また組織や文様が良く残っている数少ない現存作例としても、染織史上価値が高いものです。妙興寺で師から弟子へ大切に受け継がれてきた伝法衣は、今後我が国における染織史研究の一つの指標になることでしょう。

（天野歩）

参考文献

- 「高僧と袈裟」図録（京都国立博物館、二〇一〇年）
 小林 彩子「妙興寺開山にかかる袈裟」妙興寺展「図録」（一宮市博物館、二〇一四年）
 山川 暁「中近世染織品の基礎的研究」（中央公論美術出版、二〇一五年）



①大応国師袈裟



②田相の四葉花文



③大照禪師袈裟



④田相の麒麟文（右向き）

平成27年度後期 催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

特別展
浮世絵展 ～描かれた風景～

10月3日(土)～11月23日(月祝)

企画展
2015 一宮市現代作家美術秀選展

11月28日(土)～12月13日(日)

企画展
くらしの中の民具

1月9日(土)～3月13日(日)

講座・公演

市民文化財めぐり

11月5日(木)

※詳細は市広報10月号参照。

公演
民俗芸能公演

1月31日(日)、2月14日(日)、28日(日)

講座
尾張平野を語る20

3月6日(日)、13日(日)、20日(日)

玉堂記念木曾川図書館 特別展

宮脇晴と宮脇綾子 愛のまなざし

2015年 10月9日(金)～11月11日(水)



宮脇晴《風邪をひいた自画像》
昭和57年(1982)・当館蔵



宮脇綾子《ねぶりこ》
昭和44年(1969)・当館蔵

同時開催 川合玉堂 自然へのまなざし



川合玉堂《五月雨》
昭和24年(1949)・一宮市立玉堂記念木曾川図書館蔵

宮脇晴(一九〇二～八五)は、愛知を代表する洋画家の一人です。名古屋に生まれた晴は、大正六年(一九一七)の岸田劉生らによる草土社名古屋展を契機に、愛美社を結成して細密な写実表現に挑戦しました。その後は、昭和四年(一九二九)の劉生の死もあり、細密描写から徐々に離れ、自己や家族を大らかなタッチで描きました。晴と昭和二年(一九二七)に結婚し、名古屋に移り住んだ綾子(一九〇五～九五)は、戦後になって創作アプリケの制作を始めました。花や野菜、魚などを独自の感性で造形化した作品は、自身の思いをつづったエッセイとともに多くの人々に親しまれました。

この展覧会では、平成二十五年に寄贈された新収蔵品を含む当館収蔵品のなかから、宮脇晴と綾子の作品十数点を紹介します。家族や花々など、身近なものに向けられたふたりの愛のまなざしを感じ取っていただければと思います。

また、同時開催として、木曾川図書館収蔵品の中から川合玉堂作品十一点を展示します。今回は、自然を愛し、自らの宗旨を「大自然宗」と名乗った玉堂の自然に向けるまなざしを四季ごとに紹介します。

三人の芸術家による三者三様のまなざしを、この機会にぜひご覧ください。(成河 端子)

玉堂記念木曾川図書館にて開催

一宮市
博物館
だより

第56号

発行日/平成27年10月1日
編集・発行/一宮市博物館
印刷/三井堂株式会社

利用案内

【休館日】 毎週月曜日、休日の翌日、年末年始
【開館時間】 午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)
【常設観覧料】 (企画展・聴講料含む) 一般200円(160円)、
高校・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)
※()内は20人以上の団体料金
※一宮市内小・中学生は無料
※特別展開催期間を除く
※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的
機関発行の証明書等を提示された方は無料
※身体障害者等の手帳を持参の方(付添1人を含む)は無料

〒491-0922 愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL0586-46-3215 FAX0586-46-3216
URL <http://www.icm-jp.com/>



【交通】 名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩7分
二コニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分